

アガリスクエンターテイメント

# 笑の太字

作 富坂友



**【あらすじ】**

大学の演劇学科の劇作コース。とある学生により卒業制作として提出された戯曲は、某有名傑作二人芝居の丸パクリだった…！

盗作を指摘し、認めない指導教官。

屁理屈で反論し、認めさせたい学生。

両者の闘いは、次第に“問題の二人芝居”さながらの展開を見せ始める…！

**【登場人物】**

学生 某総合大学芸術学部劇作コースの4年生。実家は北海道で養豚業を営んでいる。大学受験の最中にネット上で見た『笑の大学』（舞台版）映像に衝撃を受け、急遽進路を変更してこの学部に入學。

教員 某総合大学芸術学部劇作コースの講師。

台本 笑の太字

—————大学の演劇学科・劇作コースの研究室。机を挟んで教員と学生が向かい合っている。教員は印刷された紙の束を見ながら、

—————『笑の大学』の一日目、向坂の「劇団、笑の大学。」～椿の「さるまた…失敬！」までを引用し

教員 【出演者名】君。

学生 はい。

教員 これは昨日の夕方、君が提出した卒業制作で間違いないですか？学生 間違いありません

教員 …卒業制作の要項は読みましたか？

学生 はい

教員 「オリジナルの創作戯曲」というものだったはずですが

学生 そうですね

教員 これはなんですか

学生 創作戯曲です

教員 いやいやいや…

学生 ？

教員 思いっきり『笑の大学』じゃないですか！三谷幸喜の書いた芝居じゃないですか！全然オリジナルじゃないでしょコレは！

学生 （サッと見て）いや、オリジナルです…

教員 よくもまあそんなことをいけしゃあしゃあと…！設定も登場人物も台詞も、どこからどこをとっても『笑の大学』でしょ、これは！

学生 先生、よく見てください。

教員 ？

学生 『笑の大学』じゃありません、『笑の太字』です。

—————不敵に笑う学生。

■—————BGM「オープニング」、照明「OP」、映像「タイトル」

■—————そのまんまスタート

教員 いや、確かにタイトルは微妙に違うけど…！中身は全部『笑の大学』じゃないか！

教員 今までの卒業制作の指導に一度も顔を出さないとしたら、締め切り直前にこんなものを放り込んできて。どういうつもりですか？

学生 どういうつもりもなにも、提出日が近づいたので提出しただけです。

台本 笑の太字

教員 …君は卒業するつもりがないのか？

学生 ありますよ。なかったらこれを先生の所に出してません。

教員 あのねえ、「オリジナルの創作戯曲を書いてこい」という卒業制作で、既存の作品を丸々使って、タイトルだけダジャレみたいに変えて「オリジナルです」とって、そんなのが通用すると思ってるんですか？

学生 はい、思ってます。

教員 おおお、なんだその自信は。もうね、逆に聞きたいよ。どこをどう考えたら、これが卒業制作として認められると思ったんだ。

学生 これが僕のオリジナルの創作戯曲だからです

教員 「オリジナル」とって！タイトルしか違わないじゃないか！

学生 タイトルが違うんですよ？

教員 うん、タイトルだけな？

学生 タイトルというのは作品を象徴するものだって先生も仰ってましたよね？2年時の講義の「演劇メディア論」のことです。

教員 えっ

学生 作品を象徴するものが異なってるんですよ？ということはもう別の作品じゃないですか。

教員 そうはならないよ

学生 なぜですか

教員 中身が『笑の大学』と全く一緒だからだよ！

学生 先生はこれが『笑の大学』と全く一緒だってなぜ言い切れるんですか？

教員 なぜ、って。実際一緒だからだよ。僕も知ってるから、その作品は。

学生 作者の三谷幸喜は戯曲を出版しません。『笑の大学』の戯曲は世に出回っていないんです。先生は読んだことがありますか？

教員 いや、ないけど

学生 だったら、これが完全に一緒かどうか、わからないじゃないですか。

教員 だから僕も念のため昨日DVDを確認したよ！

学生 おっ

教員 再生しながらこれを一から読んでみたよ！

学生 どうでした？

教員 全部一緒だったよ！

学生 …でしょう？

台本 笑の太字

- 教員 「でしょう？」じゃないんだよ！何で誇らしげなんだ！
- 学生 一生懸命つくった卒業制作ですよ？二時間近い芝居を一字一句違わず文字起こしたんです。そりゃ誇りにも思いますよ。
- 教員 誇るポイントが違う…！「オリジナルだ」っつってんだから！文字起こしの正確さを誇るんじゃないよ！
- 教員 だいたい、文字起こししたということはオリジナル作品ではないってことだろ
- 学生 果たしてそうですか？
- 教員 はい？
- 学生 確かに、戯曲として存在しているものをコピーしたり書き写したりしたのなら、それはオリジナル作品ではないでしょう。でも僕の場合は、映像作品という違う媒体の表現を、自分の目で見て、耳で聞いて、戯曲という形に落とし込んだんです。それは風景を見て風景画を描くことや、風景を写真に収めることと何が違うんですか？
- 教員 は？
- 学生 先生は風景画や風景写真はオリジナル作品ではないと仰るんですか？
- 教員 そういう問題じゃないだろう。
- 学生 そういう問題ですよ！僕の『笑の太字』が『笑の大学』のパクリだというなら、ゴッホの「ひまわり」はひまわりのパクリだし、松尾芭蕉の「五月雨を 集めてはやし 最上川」は最上川のパクリなんじゃないですか？
- 教員 何を言っているんだ君は。
- 学生 すいません風景写真の有名な人はすぐ出てきませんでした
- 教員 そしてよく自分とゴッホと芭蕉を並べられたな！
- 学生 芸術家としての価値の大小は問題じゃないんです！
- 教員 だとしてもだ！風景画や風景写真や、そして俳句もだけど、それらは風景を自分の中でどう解釈してどう表現するか、というところにオリジナリティがあるわけだろ？
- 学生 はい
- 教員 君のはただ写してるだけじゃないか。
- 学生 違います、僕のこれにも解釈と表現があります。
- 教員 どこにあるんだよ
- 学生 あの映像を見て、どの動作をト書きにするか、文章の末尾を「、」にするか「。」にするか、ありとあらゆる表現の中からこの表記を選んだんです。
- 教員 些細な問題だよ！そんなもの！

台本 笑の太字

学生 「些細な問題」…！？戯曲を書く上での文章の表記を指して「些細な問題」ですか！劇作コースの先生が聞いてあきれますな！

教員 それは…言葉のアヤというものだよ！

学生 …先生、語るに落ちましたね

教員 ！？

学生 “Think twice before you speak” “綸言汗の如し（りんげんあせのごとし）” 一度口にした言葉は取り返すことができません。言葉を軽んじる方が劇作を教えるとは、とんだお笑い種だ。

教員 君は…なんだ！シンプルにむかつくな！

学生 お気に障ったんなら謝ります。

教員 障ったねえ！

学生 僕の卒業制作を認めない、と？

教員 ああ認めない。

学生 （個人的な感情で落とすのか！と）…！

教員 でもそれは気に障ったからではありません。単純に、これが卒業制作の条件を満たしていないからです。なぜなら、この作品はオリジナルの創作戯曲ではない。

学生 じゃあ先生、教えてください。オリジナルってなんですか？

教員 はあ？

学生 オリジナルであることが条件だっていうなら、その定義を教えてもらわないと達成しようがないじゃないですか

教員 定義も何も

学生 答えられないんですか？

教員 答えられるけど…まあ、だから、君の独自のものだよ。

学生 独自のもの…！？

教員 まあ一般的にはオリジナルってのはそういうことでしょうよ

学生 現代の創作において独自のものなんて存在するんですか？すべての物語の類型はシェイクスピアの時代に完成しているし、すべてのコード進行はバッハの時代に出尽くしているといわれているのにですか？

教員 御託はいいんだよ

学生 僕たちがこれから作るものなんて全て過去の膨大な作品群の模倣に過ぎないんです。そんな時代を生きる僕らに、独自のものを、独自の創作戯曲を求めるんですか！？先生、それはあまりに酷というものだ…！

台本 笑の太字

- 教員 あかねえ、私は何もこの世界で唯一無二の絶対的な個性を発揮しろ、と言っているんじゃないんだよ。ただ、他の作品を書き起こしたものを出すなって言ってるだけなんだよ。もうこの際だから言っちゃうけど、自分で考えて書いてきたものならなんだっていいんだよ。
- 学生 この作品を「自分で考えて書いたものではない」といわれるならお手上げだ…！
- 教員 なんでそうなるんだよ！
- 学生 それに、僕にオリジナリティを捨てさせたのは、先生じゃないですか。
- 教員 ？
- 学生 僕がこの学部に入って最初の講義は【基礎演習Ⅰ】。先生の講義です。
- 教員 ああ
- 学生 先生はその講義で最初に言ったことを覚えていますか？
- 教員 最初に…？いや…
- 学生 僕はハッキリ覚えています。先生はこう仰った。「もし君達が面白いホンを書きたいと思っているなら、オリジナリティなんて豚に喰わせろ」って！
- 教員 そんな過激なこと言ってたっけ…？
- 学生 言っていました。その一言は大学一年生の純粹だった僕には衝撃でした。僕はその日のうちに今までに書いた戯曲を全てシュレッダーにかけ、裁断し、「エサにしてくれ」というメモを添えて、養豚業を営む実家へ速達で発送しました。
- 教員 いやホントに豚に喰わせなくてもいいんだよ！？
- 学生 実家からは「紙はエサには使えない」という返事がきました。
- 教員 でしょうねえ！
- 学生 それ以降、僕は模倣に目覚めました。課題が出るたびに、戯曲の構成を真似、人物造形を真似、テーマを真似、セリフ回しを真似ました。結果、コピーすればするほど、原文に近ければ近いほど、提出したものの評価は高かった。その中には先生、あなたの課題もありましたよ。
- 教員 なんて自信満々な自白…！
- 学生 だから最後の卒業制作では、自分が一番好きな作品を書き起こして提出することに決めました。
- 教員 …いや決めるなよ！オリジナルだ、つつってんだから
- 学生 【出演者名】先生、これが、オリジナリティを豚に食わせた者の末路ですよ！
- 教員 レアケース…！
- 学生 僕というモンスターを生み出したのは、先生！あなたです！
- 教員 …違くない！？君が拡大解釈しすぎただけじゃない！？

- 学生 拡大解釈…！
- 教員 そりゃ最初は模倣から入れ、って意味でそういうことを言ったかもしれないけど、最終的には、卒業制作の段階ではオリジナルで書けるようになりますよ、って、そういうことだよ。いや、普通わかるでしょ。
- 学生 だったら！なぜ「豚に食わせろ」なんて言ったんですか！
- 教員 いや、だから「最初は」っていう…
- 学生 先生はご存じない、豚の食欲を…！一度あいつらの前に出したエサは取り戻すことができないんです！
- 教員 知らないよ豚の生態は…！
- 学生 オリジナリティを捨てろと教えておきながら、最後の最後に「オリジナルじゃないからダメ」って、とんだ裏切りだ…！
- 教員 だとしても、君が極論を言っているだけなのは変わらない。
- 学生 なんでですか
- 教員 (遮って) なぜなら、同じ発言を聞いたほかの学生はみんなオリジナルの創作戯曲を書いているから…！
- 学生 ならば言いましょ！オリジナルの創作戯曲を書いてこいと言われてオリジナルの創作戯曲を書いてくる奴らに何のオリジナリティがあるんですか！
- 教員 はあ？
- 学生 そんな奴らより、オリジナリティを捨てた僕の作品の方がよっぽどオリジナリティがアルジナリティじゃないですか！
- 教員 なんだアルジナリティって！
- 学生 先生。実際問題、他の奴らのと僕のと、どっちが面白かったですか？僕のもしょう？
- 教員 そりゃ『笑いの大学』だからね！
- 学生 中身もそうですけど、僕のこの行為のほうがあいつらの凡庸な「オリジナル」より面白くないですか？
- 教員 そういう問題じゃない
- 学生 先生はなぜ僕だけを呼び出したんですか？面白かったからでしょう？
- 教員 問題があったからだよ！
- 学生 それだけイレギュラーだった、珍しかったということですよ？それは先生の仰った「独自のもの」じゃないんですか？
- 教員 悪い意味でな！
- 学生 悪い意味とか良い意味とかないんです！

台本 笑の太字

教員 あるわ！…君は卒業したくないのか？

学生 したいですよ

教員 だろ？私だって君を卒業させたいんだよ。

学生 だったら…！

教員 「だったら」じゃない！

学生 僕は卒業したい、先生は卒業させたい、ほら、互いの利益は一致しているんです！

教員 （台本のコピーをたたきつけて）コレを除いてな！

学生 （ため息）平行線ですね

教員 君のせいでね！

学生 先生が一言「認める」と言えば万事解決するんですよ？

教員 そんなことできるわけないだろ！

学生 先生一人が反対してるんです！

教員 君一人しか賛成してないけどな！っていうかむしろ他のどんな教員のところに持って行ったって誰一人認めないに決まってる。

学生 試してみますか…？

教員 …うん、試してみよう（立ち上がって出ていこうとする）

学生 ちょっ！待った！先生！待ってください！

教員 なんだよ

学生 冗談ですよ。

教員 …どっからどこまでが！？君は最初っから冗談みたいなバカげたことしか言っていない！

学生 まあ落ち着いてください。

教員 君のせいだからな？

学生 どうしたら認めてくれるんですか？

教員 だからオリジナルの戯曲を書いて来たら、だって。何回言わせるんだ。

学生 先生、これはオリジナルの戯曲だって何回言わせるんですか？

教員 （なんか言い換えて）じゃあ…もう、いいよ。これを使っていいから、『笑の大学』だと思われなようなもの書き変えて提出しなさい。

学生 もうすでに書き変えました、タイトルを。

教員 そういうことじゃない

台本 笑の太字

学生       なぜですか

教員       タイトルだけ変えたって意味がないからだ！

学生       意味がない…！タイトル、つまり作品の象徴を変えているというのに？

教員       『笑の大学』を『笑の太字』にするのなんてただのダジャレだろ！そんなものに意味があるとは思えない。

学生       意味はあります！

教員       どんな！

学生       『笑の大学』の「大学」とは、作中で描かれる検閲が喜劇作家の養成所のように、学校のようになっていくことを差していますよね。

教員       そうだろうね

学生       そして僕の『笑の太字』の「太字」ですが。「太字」というのは「重要であること」を意味しています。

教員       はあ

学生       この作品で語られる「笑うことで生きる希望が湧いてくる」「笑いこそが重要である」というメッセージ、それを強調したのが僕の作品『笑の太字』です。

教員       こじつけたな！

学生       ありがとうございます

教員       ほめてない！それに結局「笑いこそが重要である」ってメッセージになるなら、もとの『笑の大学』と変わっていないってことになるじゃないか！

学生       変わっています。

教員       どこが！

学生       むしろメッセージが強調されて、洗練されたとすらいえる！

教員       身の程を知りなさい！

学生       「身の程なんて、一生知るな」…誰の言葉かご存知ですか？

教員       知らないけど…！昔の偉い人かなんかだろ？どうでもいいよ！

学生       …ナイキのCMですよ。

教員       ホントにどうでもいいよ！

教員       とにかく！タイトルだけを変えたものでは私は卒業制作としては認めない！他にも変えてこない限り留年だ！

学生       じゃわかりました！僕も折れましょう！

教員       そのほうが懸命だ！

台本 笑の太字

学生 登場人物の二人！検閲官の向坂と喜劇作家の椿。その二人を、カタカナ表記にしましょう！

教員 …折れてない！

学生 どうですか！

教員 「じゃあ認めよう」って言うと思ったか！

学生 ダメなんですか！？

教員 当たり前だろ！カタカナにしたからどうだっていうんだ！

学生 じゃあ漢字で違う字を当てます！

教員 だから…！

学生 サキサカは「向かう」に「坂」だったのを後・先の「先」に大阪の「阪」にします！

教員 そういうことを言ってるんじゃない！

学生 ツバキは一文字で「椿」だったのを樹木の「木」を足して二文字で「椿木」と読むようにします！

教員 その程度の変更でOKを出すと、本気で思ってるんですか？

学生 思ってるわけじゃないですか

教員 （じゃあなぜ言った！）

学生 …わかりました、僕も腹をくくります。

—————学生がPCに何かを打ち込んで

教員 もう嫌な予感しかしないよ！

学生 変えました。

教員 （見て）ほらやっぱり…！

学生 「サキサカ」は「左」に「鬼」に「鎖」に火薬の「火」で「左鬼鎖火」、「ツバキ」は津波の「津」に「刃」に「鬼」で「津刃鬼」です！

教員 暴走族じゃないんだから！

学生 どうです？だいぶ雰囲気変わったでしょう～？

教員 「鬼」ばっか入ってる…！

学生 ええ、だから「ツバキ」の「キ」は「牙」って字にしようかと思いましたが、『グラップラー刃牙』の「刃牙」と被ってるんでやめました。

教員 気を遣うポイントが違う…！

学生 これをパッと見て『笑の大学』に見えますか？

教員 確かに見えないけども…

台本 笑の太字

学生 でしょう？でもね、先生。読んでみると、ちゃんと『笑の大学』なんです。

教員 …だからダメなんだよ！

学生 (笑ってる)

教員 もう、なんだ！今の時間はなんだったんだ！

学生 戯れです！

教員 (指さして) 留年。

—————教員が立ちあがり、帰ろうとする。引き留める学生。

学生 ちょっと待ってください。

教員 登場人物の名前以外を変えなさい！台詞の部分！

学生 台詞の部分…！

教員 そうだよ

学生 じゃあ、現状セリフを「 」で囲んでいる表記なのを、スペースを空ける表記にするっていうのでどうですか？

教員 その変更は何の意味があるんだ。

学生 じゃあ明朝体なのをゴシック体にします

教員 内容を変えなさい、内容を。

学生 内容を変えるっていうと…え、例えばどういうことを指しているんですか？

教員 なんでもいいんだよ。例えば…登場人物の設定を変えるとか。

学生 ちょっと待ってください！そんなことをしたら…『笑の大学』とは全く別物になってしまう…！

教員 だから全く別物にしろって言ってるんだ！

学生 そうはいかないんですよ！

教員 なぜだ…！

学生 台詞は『笑の大学』と同じでないという意味がないからです！【シーン4】

教員 だから…え、それは、え、なんで？

学生 …。

教員 君がそうまでして『笑の大学』を使いたい理由がもうわからない！

学生 …。

教員 っていうか、そのさっきからごちゃごちゃ言ってる屁理屈を聞く限り、君がオリジナル作品を書けないとも思えない。

学生 どうでしょう

台本 笑の太字

- 教員 で、あとはこのタイトル。『笑の太字』って！隠す気ゼロだろ。バレようとしているとしか思えない…！
- 教員 何が狙いだ？
- 教員 “オリジナルの創作戯曲”を提出しろ、って言ってるのに、三谷幸喜の『笑の大学』をそのまま提出する。もうね、素直に知りたいよ
- 教員 なんでこんなことをした？
- 学生 三谷幸喜が許可を出さないからです。
- 教員 …は？
- 学生 『笑の大学』に限らず、三谷幸喜は他人が自分の作品を上演するのを認めていません。戯曲も、岸田國士戯曲賞を受賞した『オケピ』だけ賞の慣例に従って出版しましたが、それ以外は発表していません。
- 教員 まあ、そうだね、
- 学生 だから、僕が代わりに戯曲の形にして発表するんです。
- 教員 …いやいや、「代わりに」とかじゃない
- 学生 だって、面白い作品は上演されるべきじゃないですか。そして『笑の大学』が一番面白いじゃないですか。
- 教員 いや、この作品が面白いのは知ってるけど。僕も見に行っただし。
- 学生 生で見たんですか？
- 教員 ああ、学生のころに。再演の方かな？PARCO劇場で。
- 学生 うらやましいです。僕も映像を見てすぐに「いつかはこの作品を生で見たい」と思いました。でも北海道のド田舎に住んでる高校生には難しいんで…僕も通販でこれ（DVD）買いましたよ。
- 教員 ああ、
- 学生 それで、このリーフレットを見て、愕然としましたよ。
- DVDのリーフレットを出して「作家からのお願い」のところを読みあげる。
- 学生 「作家からのお願い」僕がホンを書くのは、大抵は役者のためか、プロデューサーのため。だから自分の作品が、自分の知らないところで、自分の知らない人たちによって上演されたという話を聞くと、無性に悲しくなるのです。
- 学生 活字になってもいない芝居を、台詞の一つ一つをビデオから起こしていくなんで、そんな気の遠くなる作業は、やめましょう。そこに労力を使うなら、自分たちでゼロからホンを書いた方が絶対いいです。
- 学生 そんなわけで、このDVDは、決して一般の上演を前提としていないことを、どうかご了承下さい。この物語が、僕の知らないところで上演されるケースがないことを切に望んでいます。

—————学生がリーフレットを叩きつけて

学生       なんて身勝手な…！

教員       ええっ

学生       だってこの作品は三谷幸喜が上演しない限り、もうどこに行っても見られな  
いってことでしょう！？

教員       …うん（その何が悪いの？と）

学生       みんな「演劇は生で見てこそだ」とか「映像だと本当の価値は伝わらない」と  
か言いますが、じゃあ一番好きな作品をもう生で見られない場合はどうす  
りゃいいんですか。

教員       そりゃ演劇ってそういうものだから…

学生       だからこそですよ！だから本当に面白い作品はどんどん上演してほしいじゃな  
いんですか。いや、上演されるべきなんですよ！だってそもそも演劇ってそう  
やって上演されることで継承されていったものなんじゃないんですか？シェイ  
クスピアだってそうですよ！歌舞伎だってそうですよ！そうやって古典になっ  
ていったんでしょう？『笑の大学』だって古典になりえたんです。なのに、作  
者のこの狭量な考えのせいでその道が閉ざされてしまったんです！

教員       狭量って…君はファンなんじゃないのか？

学生       ファンだからこそ言ってるんですよ！古典になったら、ずーっと続いていっ  
たらどんなにうれしいか！それが実現されないのが悔しくてならないんです  
よ！

教員       でも作者本人がそれを望んでないんだよ。

学生       三谷幸喜作品の価値に比べたら三谷幸喜の意思なんて些細な問題ですよ！

教員       些細な問題！？

学生       はい！

教員       暴論…！

学生       『笑の大学』にはそれだけの価値がある。だから僕はこれを戯曲として発表し  
ます。

教員       …いや、身勝手なのはそっちでしょう？

学生       なんでですか？

教員       10年くらい前か、三谷作品のタイトルを変えて無許可で上演して大問題に  
なった事件があったよ。

学生       劇団joyですね、三谷氏の劇団時代の作品、『東京サンシャインボーイズの  
罨』を『ETERNITY』って名前で上演した問題でしょう？

教員       よく知ってるな。

台本 笑の太字

- 学生 調べましたから。あとは『笑の大学』を『ムサシ』って名乗って上演したケースもあったって聞きました。
- 教員 君のやっていることはそれと同じだぞ？
- 学生 全く違います。僕は、バレないように名前を変えてこっそりやることには興味がありません。もっと言うと、そんな行為には何の意味もないと思っています。
- 教員 …？
- 学生 僕は、自分がやりたいからやるんじゃないありません。これが公開されて広まっていくことが演劇界の為になるからやるんです。
- 教員 君が発表する程度で世の中に広まるとは思えない。
- 学生 どうでしょうか？
- 教員 それに、もし広まったところで、作者の三谷氏が「許可しない」と明言しているものを広めてどうするっていうんだ。
- 学生 最初は無許可のままで、「勝手に上演する」という形で広まっていくことでしょう。しかし、それが広がり、三谷幸喜の作品を上演することの効果と意義を皆が理解したら、どうなりますか？三谷氏に対して「上演を認めるべき」と声を上げる人間は僕だけではなくるはずですよ。
- 教員 …！
- 学生 僕はそうやって三谷幸喜を動かします。
- 教員 どうかしてるよ！本当にそれが正しい手段だと思ってるのか？
- 学生 思っています。
- 教員 なんでだよ！もし本当に三谷氏を動かしたいと思ってるなら、手紙を書くとか、直談判するとか、方法はいくらでもあるだろ。
- 学生 もちろんほかの方法も考えました。でもねえ、手紙を書く？直談判する？そんなの黙殺されて終わりですよ
- 教員 それは、やってみないとわからないじゃないか
- 学生 そもそもこの問題は僕と三谷幸喜の二者の間で終わっていい問題じゃない！広く世に問うべき問題なんです！だから表現にするんです。
- 学生 そして今の自分にできる一番ふさわしい発表方法を考えました。その結果、僕はこれを卒業制作として発表する、という結論に至りました。
- 学生 これは、後世の為に三谷幸喜の『笑の大学』を戯曲の形で残すと同時に、それを発表することによって、上演許可を出さない三谷氏の姿勢に疑問を呈し、世論を、ひいては三谷氏自身の考えを動かすことを目的とした表現なんです！
- 教員 正気の沙汰じゃない！
- 学生 そうですか？

## 台本 笑の太字

- 教員 そうだろ！だって、こんなことをして世の中を動かすとか、三谷幸喜を動かすとか、そんなこと実現するわけがないだろ？
- 学生 実現できそうだからやるんですか？違うでしょう？実現するべきだと思うから発表する、そういう願いをこめて発表する、それが表現じゃないですか！それがアートじゃないですか！
- 教員 （これが）アート…！？
- 学生 はい。『笑の太字』は、『笑の大学』への、三谷幸喜への思いを表現したアート作品です。
- 教員 ただ文字起こししただけでしょ
- 学生 だったら、デュシャンの『泉』はどうなんですか？
- 教員 はあ？
- 学生 現代美術の巨匠・マルセル＝デュシャンは便器に『泉』っていうタイトルをつけて発表しました。あれだって物としてはどこにでもあるただの小便器ですよ？でもそれを美術作品として発表するっていうコンセプトによって、『泉』は「20世紀で最も重要な美術作品」に選ばれているじゃないですか。アンディー＝ウォーホルだってキャンベルスープの缶を印刷しただけのものを発表したじゃないですか！この作品だってそういうことですよ！これは『笑の大学』をそのまま文字起こししたものに『笑の太字』というタイトルをつけて発表するコンセプトチュアル・アートなんです！
- 教員 …。
- 学生 先生はこれでもオリジナルの作品ではないと言えますか？僕の『笑の太字』を否定することができますか？
- 教員 【出演者名】君。
- 学生 はい
- 教員 君の考えはわかりました。とてもユニークだ。非常に興味深い考え方で卒業制作に取り組んでいる。
- 学生 はい
- 教員 ただ、全部間違ってる。
- 学生 …！
- 教員 例えば法律。著作権法を持ち出して君の行為の違法性を説くこともできる。
- 学生 （反論しようとして）
- 教員 でもそれを言えば君は芸術と法律の関係性について反論してくるだろうね。例えば壁の落書き、バンクシーのグラフィティアートの話でも持ち出すんじゃないか？でもね、僕も全てのアートが合法でなければならないとは思わない。だから今ここで法律の話を持ち込むのはやめておこう。

## 台本 笑の太字

- 教員 また、「オリジナルの創作戯曲」という卒業制作の条件だとか、指導教官としての僕の権限を持ち出して君の提出物を否定することも出来る。しかしそれも単なるこの大学の制度の話にすぎない。それはここでは脇に置いておこう。
- 教員 そのうえで、ここから先は大学の教員ではなく、一人の創作者としてお相手しよう。
- 学生 は？
- 教員 君が間違っているところは、大きく分けて2つある。
- 教員 まず第一に。アートとしての問題点。
- 教員 君はマルセル＝デュシャンやアンディー＝ウォーホルの名前を出して、この作品がコンセプチュアルアートの一つだという主張をしたね？
- 学生 …。
- 教員 そういったビッグネームを出すことが悪いと言っているわけじゃないんだ。さっき君も言っていたな、「身の程なんか、一生知るな」うん、ナイキのCMだっけな？いい言葉だね。アーティストの在り方としても正しい姿勢だ。だから君は自分とゴッホと芭蕉を並べて語ってもいいし、自分とデュシャンとウォーホルを並べて語ってもいい。
- 教員 しかしそういった知名度の大小にかかわらず、彼らの作品と君の作品には大きな隔りがある。
- 教員 …というより、そもそも、この作品にはコンセプチュアルアートとしての価値はない。
- 学生 …！
- 教員 癪に障ったようだね。
- 学生 どのような点で…？
- 教員 「笑の大学をそのまま使う」仮にその行為に目をつぶったとしても、君の提出したものには重大な欠陥がある。なんだかわかるか？
- 学生 …なんですか？
- 教員 確かに君のその考え方は面白い。内容に賛同することこそできないが、作品作りの動機としては大変ユニークだ。狙いとしては悪くない。
- 教員 しかし、それはこの戯曲からは読みとることができない。君が今みたいに自分の口で話して、聞かせて、初めて伝わるものだ。つまり『笑の大学』を丸写しして『笑の太字』というタイトルをつけるこの行為と、君が言った理屈は、関係がない。
- 教員 よって、これはコンセプチュアルアートとして見ても一つの独立した作品たりえない。これは、三谷幸喜の『笑の大学』を書き写しただけの、紙束にすぎない。

学生 …。

教員 そして第二に「広めるために丸写しする、それを発表するために卒業制作の場を使う」という君の理屈。嘘だろ。

学生 は？

教員 書けなかったから丸写ししたんだろ？

学生 （鼻で笑って）全く違います

教員 卒業制作を、って話じゃない。笑の大学みたいな作品を書きたいけど、書けなかった。だからこんな真似をした。

学生 違います。

教員 僕にはわかる。

学生 何を根拠に？

教員 僕も三谷幸喜のファンだからだよ。さっきも言ったけど学生のころ『笑の大学』を見て、君のように衝撃を受けたよ。でも僕はそれを受けて自分の作品を書いた。文字起こしをするだけで済ませたりしなかった。

学生 それがなんなんですか？

教員 衝撃を受けるほど面白い作品を見た。しかし作者が上演を認めていなかった。なぜそこで「上演を認めない作者が悪い」となるんだ？なぜ「自分で面白い書こう」とならないんだ？

学生 自分で書くことだけが表現だとは思いません。

教員 しかし君は劇作コースに入った。一度は自分で書く意志を持ったということじゃないのか？

学生 …。

教員 だけど、おそらく自分の納得するようなものを、書けなかったんだろう。それで自分が書かなくてもいい理由を考えた。つまり君は書かなかったんじゃない。書けなかったんだ。

教員 それ自体は悪いことじゃない。自分で書いてみることで書く以外の道を見つける、大いに結構。

教員 しかし君はその鬱憤を上演を認めない作者に向けたね。そして作者を糾弾することで自分の中の何かを晴らそうとしている、それは間違った考え方だ。

教員 そして君はほかの学生の作品を指して「凡庸なオリジナル」と言ったね？うん、確かに『笑の大学』に比べれば凡庸なのかもしれないよ。でも彼らは書いてきた。君は書かずに御託を並べているだけだ。

学生 …。

教員 アートだなんだと言っているが、君は自分の好きな作品を、自分が書かないことの言い訳に使っているだけだ。

台本 笑の太字

学生 …。

教員 だから、僕は君の考えも、それを表したこの作品も、認めることはできません。

教員 もう一度言うよ？明日までに、オリジナルの創作戯曲を書いてきなさい。

学生 …ありがとうございます。じゃあ僕からもいいですか？

教員 …？

学生 先生が間違っている点は大きく分けて二つある。

教員 …！

学生 一つ目は、なおも僕に書くことを強いる点。

教員 は？

学生 先生は僕に「書かなかったんじゃない、書けなかったんだ」といいましたね？おっしゃる通りです。先生の推察通り、僕は、書けないんです。

教員 なんだ君は、不死身か…！？

学生 そんな僕に先生は「書いてきなさい」と言い放った！これは走れない生徒に対して走れないと知っておきながら「走れ」というのと同じ行為ですよ？

教員 違うだろ！だって君は劇作コースなんだろ！？

学生 劇作コースで学んだ結果「自分には劇作ができない」という結論に至ったんです！

教員 いや劇作コースで4年間学んで全く書けないんだったら、それは学んでいるとはいえない！

学生 学んでいます！「書けない」ということを！言わば「無知の知」です！ソクラテスですよ！

教員 はあ！？

学生 ここまでの学びがありますか！

教員 なぜ書けないことをここまで開き直れる…！

学生 そして二つ目に、先生が僕の作品を認めない理由！

学生 確かに僕の『笑の太字』には至らない部分があったかもしれません。ご指摘、ありがとうございます。真摯に受け止めましょう。

学生 しかしそのあとの理由はいけない。

教員 は？

学生 先生は学生の思想次第で、作品に許可を出す・出さないを決めるんですか？

教員 …！

学生 「三谷幸喜の姿勢に疑問を呈す」っていう僕の考えがけしからんから許可を出さないって言ってますよね。それは学生の思想によって評価を決めているってことじゃないんですか!?

教員 …そうかもしれないね

学生 おおお、すごいこと言いますね。そんなこと教育者として許されるんですか?

教員 許される。

学生 (なんか言おうとして)

教員 なぜなら、「上演許可を出さない」という三谷氏の思想を君が尊重しないからだ。他人の思想を尊重しない人間の思想は尊重されない。

学生 なるほど、人権の考え方ですね?しかし『笑の大学』の上演は社会全体の利益です。公共の福祉なんです。よってそれを認めない三谷氏の人権は制限されてしかるべきなんです!

教員 あまりに馬鹿げている!ついでに、それを決めるのは君じゃない!

学生 誰なんですか?

教員 三谷幸喜だよ。

学生 三谷幸喜の作品を上演していいかどうかを、なぜ三谷幸喜が決められるんですか!

教員 君は今すごいことを言っているぞ?…当たり前だろ、自分の作品だからだよ!

学生 自分の作品…!作品というのは書いた人間のものなんですか!?

教員 そりゃあ…だって実際書いたんだもん!

学生 書くことがそんなに偉いんですか!

教員 偉いとかじゃない

学生 先生は自分が書けるから言ってるんですよ!

教員 そうじゃない

学生 既存の作品を使って何かを言うことが許されないなら、書けない人間はどう表現すればいいんですか!なにも言うなってことですか!?

教員 そうは言ってない!

学生 これは書けない人間なりに言いたいことを表現した創作戯曲なんです。

教員 しかし、だからと言って君の提出したものを通す理由にはならない。これがコンセプチュアル・アートとして成立していないことには変わりがない。

学生 しかしそれは先生の個人的な判断に過ぎない

教員 ああ、そうだ、しかし僕が指導教官だ!僕にはそれを判断する権限がある…!

学生 先生!…さっき「それは脇に置いておこう」って言ってたじゃないですか!

台本 笑の太字

教員 やっぱり脇には置かない！…なぜなら君が結構しぶといからだ！

学生 くそう！大人は汚いぜ…！

教員 仮にコンセプチュアル・アートだというならば、僕を納得させるようなものを作ってきたまえ！

学生 なるほど。先生が指導教官だから、僕は先生を納得させなければならない、と。

教員 その通り。

学生 ならば僕はこう言いましょう…先生は指導教官だから、先生は僕に教える義務がある！どうしたらコンセプチュアル・アートとして成立するかを！

教員 なにを～！

学生 さぁ指導してください！指し、導いてくださいよ！

教員 なんなんだ…こんなに偉そうに教えを乞う人間が過去にいたろうか…！

学生 導けないんですか？先生は教えられないことを、自分も思いつかないことを僕に求めたというんですか！？

教員 …導いてやろうじゃないか！

学生 お願いします！しかし僕にも拘りがある、先生のアドバイスをすんなり聞き入れるとは思わないでいただきたい！

教員 もうこの際君の憎たらしさはスルーするとして！

学生 はい！

教員 現状君の作品はそれ単体で君のコンセプトが読み取れないことが問題だ。

学生 はい

教員 君は『笑の大学』をそのまま文字起こしして印刷して製本した

学生 そうですね

教員 しかしそれでは伝わってない。ということは、何かしら内容に手を加える必要があるってことだ。

学生 ちょっと待ってください！デュシャンの『泉』だってそのままじゃないですか！

教員 『泉』はサインを加えた。君は全く変えていない。

学生 じゃあ僕もサインを書きますよ！

教員 違う！そういうことじゃない！三谷幸喜を批判するその思想が、この作品を読んだだけで伝わるものにしなければいけないんだ！

学生 じゃあ本文の前に「三谷幸喜のバーカ」って書いてやりますよ！

教員 もっと違う！全然そういうことじゃない！

台本 笑の太字

学生       じゃあどうということなんですか

教員       中身の『笑の大学』の部分に手を付けるしかないんじゃないか？

学生       それじゃ僕のこの『笑の太字』じゃなくなってしまう！

教員       そもそも「オリジナルの創作戯曲」という卒業制作の条件がある以上、台詞や中身がまんま同じものはアートだろうが何だろうが認められない！

学生       先生！さっき卒業制作の条件も脇に置いておくって言ってたじゃないですか！

教員       ああ、言った！言ってはみたものの、実際のところ僕にその権限はない！

学生       はあ！？

教員       なぜなら、それは劇作コース全体で定められているからだ！そして僕は一介の雇われ講師だからだ！

学生       哀しい…！

教員       コンセプチュアルアートとして成立していようがいまいが、台詞や中身は変えるしかないんだ

学生       でも中身を変えてしまったら、『笑の大学』を世の中に広める、というもう一つの目的は達成できません。僕は『笑の大学』のような作品を広めたいんじゃない、『笑の大学』を広めたいんです！

教員       でも君だってすでに『笑の太字』にしてるじゃないか。

学生       それはタイトルだけだからいいんです。

教員       タイトルが違うんですよ？

学生       はい、タイトルだけです

教員       タイトルというのは作品を象徴するものだって僕が以前言ったはずですよ。

学生       …！

教員       2年次の講義『演劇メディア論』のことです。

教員       君はもうすでに作品を象徴するものを変えているんですよ？だったら台詞を変えるだけで一体何が失われるっていうんだ？

学生       屁理屈…！

教員       屁理屈じゃない、真理だ。

学生       何言ってるんですか！

教員       どこまでならいいんだ…？

学生       は？

教員       どこまで同じなら『笑の大学』で、どこまで変えたら『笑の大学』じゃなくなるんだ？

## 台本 笑の太字

- 学生 どこまでっていうか…上演したら同じものになる必要があります。
- 教員 ということは、それを見たときに、知ってる人は誰もが「『笑の大学』だ」と思えるもの、知らない人は『笑の大学』と同じ感動を得られるものになればいいんだろ？
- 学生 まあそうですけど
- 教員 つまり『笑の太字』は『笑の大学』と同じセリフである必要は、ない。
- 教員 それに台詞が一緒だったらただのパクリだと思われるだけだ。実際僕もそう思った。そうなったら広まるものも広まらないだろ。
- 学生 パクリだったら広まらないんですか？
- 教員 広まらないだろ
- 学生 三谷幸喜だってパクってるけどその作品は広まってますよ？
- 教員 は？
- 学生 『12人の優しい日本人』は『12人の怒れる男たち』のパクリだし、『古畑任三郎』は『刑事コロンボ』のパクリじゃないですか！
- 教員 三谷幸喜はパクってるんじゃないで元作品をアレンジしてるだけだろ。
- 学生 『12人の怒れる男たち』と『12人の優しい日本人』は、『刑事コロンボ』と『警部補古畑任三郎』は、何か変わってるんですか！？
- 教員 設定とかが変わってるだろ
- 学生 日本に置き換えただけでしょ
- 教員 日本に置き換えたことが発明なんだよ
- 学生 日本に置き換えただけで？
- 教員 日本に置き換えたことで…新しい価値が生まれているんだよ！
- 学生 じゃあもともと日本が舞台の『笑の大学』は違う国に置き換えればいいってことですね？
- 教員 え？
- 学生 英語に置き換えます
- 教員 英語版の『笑の大学』はもうあるよ！もしかして今度はそれを文字起こしする気なんじゃないだろうな…凶星だな！？
- 学生 じゃあロシアにします！
- 教員 ロシア版もあるよ！
- 学生 じゃあ韓国にします！
- 教員 韓国語版もあるよ！ついでに言うと韓国語版は設定も日本のままだから、設定すら変わってない！ただの翻訳だ！

学生 ダメですか！

教員 ダメだよ！

教員 『1 2人の優しい日本人』は『1 2人の怒れる男』を日本に置き換えたことで「日本人論を語る」という新しい価値が生まれている。それによってパクリではなくなっている…！

教員 だから君も『笑の大学』の設定を置き換えてた作品を作るんだ！『笑の大学』でありつつ『笑の大学』ではない作品を！

学生 「笑の大学でありつつ笑の大学じゃない作品」！？何ですか、その食べるラー油みたいなのは

教員 でもそういうことだろ？それができれば君は目的を達成できるし、僕も認めることができる！

学生 まあ

教員 だから「笑の大学のようで笑の大学じゃない少し笑の大学な作品」を作るんだよ！

学生 なんでちょっとラー油に寄せてきてるんですか！

教員 だからこれを、新しい価値をもった作品にきなさい！

学生 （考えて）無理だ…！

教員 なぜだ…！君ならちょっと考えれば何かしら思いつくだろ！

学生 それが、書ける人間の驕りだって言ってるんですよ

教員 なんでだよ！

学生 そんなこと言ってますけど、先生はできるんですか？「笑の大学のようで笑の大学じゃない作品」が書けるんですか？

教員 書ける。

学生 それじゃあ教えてください、どこをどうすればいいんですか？

教員 だからさっきも言ったけど、登場人物だよ。検閲官と喜劇作家を、会社の上司と部下にすればいいじゃないか。

学生 上司と部下が検閲官と喜劇作家になりますか？

教員 部下の出してきたものを上司がチェックするっていう構図にするんだよ。

学生 でも会社の上司と部下だと、大枠でいうと同じ組織に属していることになりまますよね、立場の違う二人が自然と歩み寄っていくっていうドラマ性がないじゃないですか。

教員 立場が違うのが必要なんだな？

学生 それでいて検閲する方が権力を持っているってのも必須でしょうね。

台本 笑の太字

教員 じゃあ検閲官と喜劇作家を、先生と生徒にすればいいじゃないか

学生 先生と生徒？

教員 生徒が何かを提出し、先生が書き直しをさせる！これでどうだ！

学生 もうありますよ！

教員 えっ

学生 『志望理由書』って作品です。『笑の大学』の構造を先生と生徒の進路指導に置き換えた作品で、高校演劇の場でよく上演されています！『志望理由書』を書き起こせって言うんですか？

教員 そうじゃない！

学生 それに僕は、『笑の大学』は検閲である、演劇の上演の際にチェックを受けなければいけない時代であることに意味があると思います。高校の進路指導の話ではその要素は得られない。

教員 だったら、高校での演劇の上演の話にすればいいじゃないか。

学生 はあ？

教員 高校生の活動に理解のない新しく顧問になった先生と、演劇部の生徒が、演目を決める話にするってのでどうだ？その感じにすれば、ほら、笑の大学の検閲の要素を達成できるぞ？

学生 それじゃダメなんです…！

教員 なぜだ！

学生 戦争の話じゃないから！『笑の大学』の感動の半分は戦争モノだからですよ！

教員 なんて身もふたもない…！君は好きなんじゃないのか？

学生 舞台を高校に置き換えたらそれが達成できないじゃないですか！

教員 高校にも戦争の要素はある！

学生 どこにあるんですか！

教員 受験戦争だよ！

学生 何ってんすか！

教員 受験戦争っていわれるくらい進学実績にうるさい進学校を舞台にして、「受験が大事だから」って理由で演劇の上演をやめさせたい先生と、それをなんとかかいくぐって演劇を上演したい生徒の話にする、ほら？これでどうだ？

学生 じゃあ赤紙はどうするんですか？『笑の大学』では、喜劇作家と検閲官の対立が一番激しくなった終盤に、突然喜劇作家に赤紙が来て、すべてが無になりますよね？そこの悲劇がドラマとして大きな部分を占めているわけですよね？舞台を高校にしたら赤紙がないじゃないですか！高校に赤紙がありますか！

教員 …赤点だよ！

学生 バカじゃないの!?

教員 バカってなんだ!

学生 すいません!

教員 生徒が赤点を取って進級できなくなったことで、すべてが無に帰してしまう悲劇、ってことでどうだ?

学生 なにが「悲劇」ですか! 赤点なんて完全にそいつのせいじゃないですか!

教員 それが勉強ができる人間の驕りだって言っているんだ!

学生 はあ?

教員 勉強ができない人間にとっては、赤点というのは逃れられない魔の手であって、

学生 いや知らないですけど! 先生の学力は!

学生 そもそもなんでそんなに高校にしたがるんですか!

教員 君に一ついいことを教えておこう。舞台を学校にすると、それだけでなんか「社会の縮図」っぽくなるんだ!

学生 なに言ってるんですか! …なにをぶっちゃけてるんですか

教員 社会派の取っ付きづらさを薄めつつ、見方によってはより社会的に見える魔法の舞台設定、それが「学校だ」…!

学生 小賢しい…!

学生 っていうか、中身は違うけど、高校を舞台にしたら『志望理由書』と被ってる感じになるじゃないですか。

教員 じゃあ…これはどうだ、

学生 何ですか、

教員 テレビのプロデューサーと脚本家!

学生 だから…

教員 脚本家が書いたものにプロデューサーがダメ出しをしていく話にするんだよ

学生 それも戦争の要素がないじゃないですか

教員 いや、テレビ業界は戦争だぞ?

学生 そういう問題じゃない。テレビはダメ!

教員 じゃあラジオにしよう!

学生 ラジオ…!

教員 ラジオ局で台本を書き換えていく話…

学生 …それは『ラヂオの時間』じゃないですか!

学生 それだって三谷幸喜の芝居じゃないですか！

教員 そうだった！

学生 『ラヂオの時間』にすればいいって話ですか！？

教員 違う違う違う！

学生 文字起こししたのありますよ？

教員 ダメだダメだ！

学生 提出しますよ～？

教員 提出するな！

学生 やり直し！

教員 くっそ…！いや、これおかしいだろ！なんで僕が君にダメ出しされなきゃいけないんだ！

学生 だって先生が「自分ならできる」って言うから。

教員 君の卒業制作なんだから、君が考えろ！

———学生が考えて

学生 やっぱり登場人物を変えるのは無理ですよ

教員 そんなことないって！

学生 というより、これは検閲官と喜劇作家にしないといけないんですよ。

教員 なんで

学生 これは三谷幸喜が自分のコメディ論を書いているからです。

学生 作中で喜劇を検閲する検閲官に既存のコメディへのダメ出しをさせて、それに  
応えて書き直し続ける喜劇作家に自分の理想の作家像を重ねているわけですよ。

教員 あー…。

学生 だから検閲官と喜劇作家でないとこの話をやる意味はなくなってしまうんです  
よ。

教員 でもストーリーと一緒に喜劇作家と検閲官の話にするんなら、それはどこまで  
行っても笑の大学だろ。

学生 かといってストーリーと一緒に喜劇作家と検閲官の話じゃなくなったら、笑  
の大学じゃなくなってしまう。

教員 なんかないのか！？ほかに変えるところは！

学生 じゃあ中国にする…

教員 だから翻訳するだけじゃ意味がないんだよ！

学生 いや、翻訳とかじゃなくて！舞台を中国にする、っていうか

教員 ?

学生 ま、中国じゃなくてもいいんですけど、そういう検閲がある国に置き換えれば『笑の大学』の本筋を変えなくてもいけるんじゃないですか？

教員 …なるほど、

学生 舞台を現代中国にすることで、検閲や国家権力による統制が過去の問題ではなく、今この瞬間にもに通ずる問題であることを描ける、っていう…

教員 それは…新しい価値かもしれない！

学生 でしょう？

教員 それに、これもあるんじゃないか？「笑の大学」をパクることで、中国のパクリ文化を風刺することも出来る！新しい価値だ…！

学生 はい！あとはセリフが一緒という問題をクリアすれば…

教員 そんなもの、中国語にしまえ！

学生 えっ！だって先生さっき翻訳はダメだって…

教員 確かにただ違う言語に翻訳しただけでは作品として新しい価値が生まれていない！しかし「検閲によって物語が変えられてしまう」というこの作品を、現代中国を舞台に、中国語で発表するこの行為！

学生教員 …新しい価値だ！

教員 だろう？十分に成立している、「コンセプチュアル・アート」だ。

学生 先生…！

教員 そして中国語になったということは、日本語である『笑の大学』と同じセリフは一つとして残らない…！

学生 屁理屈…！

教員 これなら「笑の大学のように笑の大学じゃない少し…いやすごく笑の大学な作品」と言えるんじゃないか？

学生 そして中国語にした場合…役名もそのまま使うことができます！「向坂」も「椿」もそのまま漢字で使えるんです！暴走族みたいにする必要がなくなるんです！

教員 それに中国語にすることのメリットはそれだけではない。君の最初の目的の一つにも大きく貢献することになる。

学生 ?

教員 日本語で公開した場合、それを読めるのは最大でも1億3千万人。しかし中国語にすればどうなる？…13億人、10倍だ…！

学生 グ、グローバルゼーション…！

教員 10倍の人間に『笑の大学』という戯曲を広めることができるんだ…！？

台本 笑の太字

学生 おお！

教員 それだけじゃないぞ！

学生 ？

教員 君の作品の『笑の太字』は『笑の大学』から二文字変えたタイトルだな？

学生 はい

教員 しかし中国語訳だと（紙の裏にマジックか何かで書いて）こうだ！

—————『笑的大学』と書いてある。

教員 「笑的大学（わらいてきだいがく）」

学生 より似てる…！

教員 いや、「笑的大学（シャオ ダ ダーシュエ）」だ

学生 …シャオ ダ ダーシュエ！？

教員 ああ。これで、検閲官と喜劇作家のまま『笑の大学』と同じ話ができる。

学生 卒業制作の条件も…

教員 クリアできる。

学生 ありがとうございます

教員 だから、翻訳、頑張ってください。

学生 はい！（改めて戯曲の量に戦慄し）127ページ…

教員 では明日、拝見させていただきます。

学生 一晩…

—————暗転

———翌日。

教員 「劇団・笑の大学」

学生 はい

教員 聞いたことがある

学生 そうですか

教員 私が知ってるくらいだからかなり有名な方…【出演者】君。

学生 はい

教員 これは何ですか？

学生 昨晚直してきた、僕の、卒業制作です。

教員 だから…なんでまた日本語なんだ！中国語に翻訳した「笑的大学」はどうしたんだ！昨日あれだけ話したのは何だったんだ！？

学生 …。

教員 まさか…間に合わなかったからですか！？

学生 中国語の翻訳なら、一応やりました。データとしては、ここにもうあります。

教員 だったらなんで…！

学生 ふと、思ったんです。僕が『笑の大学』を広めたいのは、作者の意思を変えてまで上演可能な状況にしたいのは、観たいからなんです。翻訳してみて気づきました。『笑的大学』は、中国語に翻訳したものは、仮に上演されたとしても、僕にはさっぱりわからない…！

教員 確かに！…そうかもしれないけど！

学生 それに、やっぱり僕はあのセリフの『笑の大学』が、好きなんです。

教員 …。

学生 だから中身は日本語のまま、オリジナルを書き起こしたもののままで、前書きを足して提出しました。

教員 「この戯曲を上演することを禁じる」この一文ですか

学生 はい。戯曲の中には、上演を前提としない「レーゼドラマ」ってジャンルがありますよね。

教員 ああ。このアイデアは面白い。このシンプルな一文を加えるだけで、それを読んだ人間に、上演許可の問題や「作品は誰のものか」などの気づきを与えることができる。

学生 はい。

教員 君の思想と『笑の大学』を丸々書き写した本文がしっかりと繋がったと言える。

学生 はい。

教員 コンセプチュアルアートとしては面白いものになった。

学生 ありがとうございます。

教員 そして、三谷氏の上演許可の問題だけでなく、戯曲と上演台本が混同されている昨今の演劇界への風刺にもなっている…！

学生 それは意識してませんでした。そうなんですか？

教員 ああ。そもそも戯曲というのは上演台本とは別物で、読み物なんだ。にもかかわらず、戯曲と上演台本を混同している風潮は目に余る。昨今の戯曲賞だってそうだ。何が岸田國士戯曲賞だ！受賞してるのは上演台本ばかりじゃないか！いい感じの劇団が上演成果で貰ってばかりじゃないか！

学生 もう呪詛がすごい…！

教員 岸田國士演劇賞脚本部門に改名しろ！

学生 先生、獲れなかったんですね！？

教員 悪いか！

学生 いえ…

教員 とにかく、そういった新しい価値も持ち合わせているわけだ。

学生 意図してませんでしたけど。

教員 【出演者名】。実に面白いコンセプチュアル・アートです。しかし、本文をそのまま使っている以上、これを卒業制作として認めることはできません。

学生 …そうですか

教員 はい

学生 わかりました…

教員 ？

学生 失礼します。

———学生があっさり引き下がり、帰っていく。

教員 ちょっと待ちなさい！

学生 …。

教員 どういうことですか！

学生 中国語じゃわからないんで、日本語のまま提出しただけです。

教員 そうじゃない！だったら、なんで反論してこないんだ！いつもの屁理屈はどうしたんだ！

学生 …もう、いいんです。

教員 わからない！

学生 状況が、変わったんです。

教員 状況…？

学生 昨日、家に帰ったあと電話がありました。実家の父が倒れたとのことでした。

教員 …それは

学生 幸い命に別状はなかったようですが、介護と家業を継ぐ関係で、実家に戻らなければいけません。

教員 そう、ですか…

学生 はい。

教員 大学はどうするんですか？

学生 中退します

教員 それはもったいない…あと数か月で卒業なのに

学生 残りの講義も、卒業式も、出られませんから

教員 しかし、卒業制作まで作ったのに…！

学生 でも、卒業制作としては認めないんでしょう？だったら卒業はできないじゃないですか。

教員 …そうでした。

教員 その戯曲はどうするんですか？

学生 うちの田舎は…演劇とか戯曲とか、そういう文化がないところですから。豚にでも食わせますよ。

教員 …。

学生 じゃあ、失礼します。

—————学生が帰ろうとする。

教員 待て！

学生 …。

教員 発表しなさい。

学生 …？

教員 卒業制作じゃなくていい。インターネットでも何でもいい、『笑の太字』はちゃんと発表するんだ。

学生 先生はこの作品のメッセージには賛同しないんじゃないんですか…？

教員 思想に賛同するのと、芸術として価値を認めるのは別の話だ。『笑の太字』にはそれだけの価値がある。だから君はこれを戯曲として発表するんだ。

台本 笑の太字

学生 ありがとうございます…

教員 それに、戯曲というのは、豚に喰わせるものじゃない。人に読ませるものだ。

教員 そして、次は本当の意味で創作戯曲を書くんだ。

学生 先生、

教員 君は「自分には書けない」と言ったが、やっぱり私には信じられないんだ。

■—————BGM「なんか良いやつ」

教員 今まで卒業制作の指導をやってきたなかで、面白いものを書いてくる学生はいた。しかし、ここまで面倒くさいやつはいなかった。一つの作品について、ここまで私に考えさせた学生はいなかった。

教員 もっと君の屁理屈が聞きたい。もっと君と議論がしたい。もっと私に考えさせてほしいんだ。

学生 でも僕が実家に帰るのは一時的なものじゃありません。実家を継ぐっていうのは…

教員 戯曲を書くのは北海道でもどこでもできる。働きながらでもできる。仕事が落ち着いてからでもいい。何年かかってもいい。何十年かかっても、君の子供が実家を継いで、君が引退してからでもいい。いつか書けたら、それを持ってきなさい。君の卒業制作はまだ終わってない。

学生 はい…。

—————学生が教員に『笑の太字』を差し出し

学生 わかりました。じゃあ、これはこの大学に置いていきます。

教員 ？

学生 もし、『笑の大学』を見て「あんな作品が書きたい」という学生がいたら、そのときは資料としてこれを貸してやってください。文字起こしをする程度の手間は省けるはずです。

教員 …わかった。この戯曲は責任をもって私が預かる。

学生 お願いします。

学生 一つだけ条件が。

教員 ？

学生 もし、そいつが面白いホンを書いたら、ちゃんと上演許可は出すように言っておいてください。

教員 ああ。戯曲としても公開するようにさせる。

学生 よろしくお願いします。

教員 ああ。

学生 失礼します。

—————学生が部屋を出て帰っていく。見送る教員。

■—————照明「部屋」「廊下」F. O

**【エピローグ】**

■—————BGM「良い感じの曲」C. O、照明「部屋」「廊下」C. I

学生 【出演者名】先生…！

—————学生が製本された一冊の台本を手に駆け込んでくる

学生 失礼します！

教員 おお、【出演者名】君、久しぶり。

学生 先生！どうのことですか！

教員 お父さんの具合はどうだね？実家のお仕事はいいのか？

学生 質問に答えてください！これはどういうことですか？

教員 どうしたんだ、血相変えて。

学生 先生はまた芝居を書き始めたみたいですね。戯曲賞に応募したって。

教員 あ、それ読んでくれたか？ぜひ感想を聞かせてほしいな。

学生 感想！？感想ですか！あろうことか僕に感想を求めますか！

教員 新作を書いたら感想を聞きたくなるのは当たり前だろう

学生 (大きな茶封筒から出して)これはなんですか。

教員 僕の新作戯曲だ。

学生 いやいやいや…

教員 ？

学生 思いっきり僕の『笑の太字』じゃないですか！上演を禁じたレーゼドラマとして三谷幸喜の『笑の大学』をやるっていうコンセプトから、前書きから、あとがきから、なにからなにまで、全部僕が書いた卒業制作のままじゃないですか！…そしてクレジットに僕の名前は一文字も載っていない！

教員 そりゃ当たり前だろ？これは僕の作品なんだから。

学生 よくもそんなことが言えますね…！「この台本は責任をもって私が預かる」って発言の顛末がこれですか！

教員 なんの話かね？

学生 僕の『笑の太字』の盗作だって話ですよ！

教員 【出演者名】君、よく見てくれ。『笑の太字』じゃない。『笑の犬字(いぬう)』だ

台本 笑の太字

学生 『犬宇』！？大学でも太字でもなく、犬に宇宙の宇で「犬宇」！？

教員 そうだ。

学生 無理やりすぎる…！なんですか「犬宇」って！そんな言葉ないでしょ！

教員 無いですよ、「犬宇」なんて。僕が作った言葉です。だから、オリジナルなんです

————ニヤリと笑う教員。

学生 …！

■————BGM「カーテンコール」

————議論が続いていく。おわり

台本 笑の太字

◆上演記録◆

サンモールスタジオ最優秀団体賞受賞記念  
アガリスクエンターテイメント第22回公演  
『七人の語らい(ワイフ・ゴーズ・オン) / 笑の太字』

《東京公演》

2016年8月31日(水)~9月4日(日)

サンモールスタジオ

《大阪公演》

2016年9月9日(金)~9月11日(日)

in→dependent theatre

【出演者】\*はアガリスクエンターテイメント劇団員

『笑の太字』

- Aチーム 学生：熊谷有芳\*  
          教員：前田友里子\*
- Bチーム 学生：甲田守\*  
          教員：津和野諒\*
- Cチーム 学生：浅越岳人\*  
          教員：塩原俊之\*
- Dチーム 学生：沈ゆうこ\*  
          教員：鹿島ゆきこ\*

【スタッフ】

脚本・演出：冨坂友  
文芸助手：浅越岳人  
舞台監督：大地洋一  
舞台美術：袴田長武  
照明：山内祐太(東京) / ぷっちヨ・渡辺佳奈(大阪)  
音響：兼坂香弥(東京) / 下田要(大阪)  
宣伝美術：カトウリョウ  
スチール：石澤知絵子  
映像収録：中川信雄  
WEB：海里有香  
制作：佐伯凜果 / 小林大陸(大阪)  
協力：榎並夕起 / 櫻村健人 / 倉垣まどか / koro / ナポ / 山本佳耶 / 新宿シアター・ミラクル / CoRich 舞  
          台芸術  
主催：アガリスクエンターテイメント 後援：サンモールスタジオ  
          協力：NPO 法人 S.A. I. / @Kyoto.lighting / 劇団熊タオル / コメディユニット磯川家 /  
          ファルスシアター / 4C  
          大阪市芸術活動振興助成金対象案件